メタコミュニケーションの行為と表現

―日独語対照のための予備考察―

丸井　一郎
（高知大学人文学部国際社会コミュニケーション学科）

Handlungs- und Ausdrucksformen von Metakommunikation
- Zur Vorbereitung einer deutsch-japanischen Kontrastierung -

Ichiro MARUI
Abteilung der internationalen Kommunikation, Fakultät für humanistische Wissenschaften,
Universität Kochi

1．導　入

メタコミュニケーションの表現と行為の典型的な現れは以下のような（架空の）やり取りに見られる。単純に言えばことばについてのことばである。ことばとはこの場合発言であり、表現形式でもある。

例１（AはBが書いたレポートを読んでいる）
Ａ１：この「めたこ」ってなあに
Ｂ１：「メタコミュニケーション」の省略だよ。
Ａ２：変なの

Ａ１では書記テクスト中の特定表現への言及（「このｘｘ」）がメタコミュニケーションの行為である。Ｂ１では「めたこ」とは「『メタコミュニケーション』の省略である」という提示がそれにあたる。Ａ２ではこの省略形について「変なの」という評価を表す表現を用いて、用語法に関するメタコミュニケーションの行為（発話）が行われている。

メタコミュニケーションの暫定的な定義として、テヒトマイアーは、R. ヤーコブソン（ヤーコブソン1973，191）以来の一般的な観念に拠りつつ、「コミュニケーションについてのコミュニケーション」という定式を提示し、その際さらに２つの側面が区別されることを指摘する（Techtmeier 2001，1450）。一つは個々の具体的な行為状況を超えて、ある集団に共通する言語やコミュニケーションに関する意識を問題にするときに前景化する側面である（Techtmeier 2001，1451）。これは談話分析などに対して従来の意味で社会言語学の問題設定であり、典型的には関連の語彙や慣用句などの表現形式に注目する。この側面を以下では「行為外的」なメタコミュニケーションとする（注１）。もう一つは、談話（会話）分析の研究などで見られるように、メタコミュニケーションの表現や発言がテクストの構成プロセスや対面談話の進行を作り出す上で有する意味と機能の側面である（同所）。この側面を「行為内的」なメタコミュニケーションという概念で表す。これは例えば、進行中の対話の中で相手の理解を確認する（「今の点いいですか？」）、暗示的に導入された話題を明確化する（「ｘのことを聞きたかったの」）ことなどが特定の発話を通じて実現され対話の進行自

体を形成することにあたる。本研究では、このうち前者つまり行為外的なメタコミュニケーションにまず着目し、行為内的メタコミュニケーションについてはその後の論究課題とする。

2．構想の経緯

本研究構想の直接的な出発点となる論は、丸井（1996）および、西嶋義憲、野呂香代子、山下仁らとの共同研究（Marui et al. 1996）である。これらは、相互行為の評価に関わる概念とその表現（相互行為の評価概念・表現）の日独対照を主題とする。特に西嶋（2000）は、丸井（1996）で提起された理論的な枠組み（「通常性」の概念など）を用いて、評価概念・表現の分析に関する幾つかの提案をなしている。同じく西嶋（2003）は、ドイツ語のメタコミュニケーション表現であるDemutの日本語への（不適切な）翻訳対応を検討し、背景にある通常性の差異に言及している。本構想はそれらの論の対象規定を拡張し、評価表現のみならず、およそ（主として言語による）相互行為を言及対象とするメタコミュニケーション全般を対象とする（注２）。

上記の「通常性」などの操作概念は、その後の研究（丸井2001 / 2001a / 2003）において事例の分析などを通じてさらに詳細に論究された。それら研究のあるものにおいては、談話行動における随伴的非言語行動に注目し、それがどのように言語表現と一体となってコミュニケーションの出来事の進行と意味を形成するかを解明した。その際、言語・非言語表現の使用を含めて、何が「通常」とされる談話行為のあり方であるかが、社会文化集団ごとに異なっている点に注目した。表面的に類似した状況でも意義関連（端的には参加者がその成立・不成立を気にする事柄）に変異があれば、異なる手順が形成され、表現にも変異を生じうるという事象である。この様々に異なる「通常性」のあり方を相対的な基準として成立するメタコミュニケーション表現の諸相という点が本構想への出発点となっている。例えば発言すべき時でなければ「でしゃばり」、すべき場合に発言がなければ「無愛想」や「気が利かない」などなどの評価を表すメタコミュニケーション表現が可能となる。いつどこが発言すべき場であるかは社会文化集団ごとに異なる。つまり談話行動を含む相互行為一般における社会文化的差異（異文化性、異文化適応）への注目の帰結として、行為参加者が自他の言動をどのように理解し、そのことをどのように表現するかを解明することが課題として浮上する。

3．より広い背景

メタコミュニケーション関連の研究で先行するものとして、1970年代以来の発話行為理論において特に集中的に行われた遂行動詞（performative Verben）や発話行為を記述する表現の研究がある（Wunderlich 1976）。言語哲学に起源を持つこれら研究における重点は、普遍的な（と措定された）類型の発話行為の内的構造と行為遂行の論理的条件、関連表現の意味論的特性化にあり（Burghardt 1986）、個々の集団に特有の歴史的・社会的かつ文化的な情報を対比的に扱うことは少なかった。これと同時期にドイツ語圏では、相互行為としての（主として対面）談話の研究が進み、その過程でメタコミュニケーション行動が、特定の類型の談話行動、例えばインタヴュー談話などの組立に果たす役割が解明された（Schwitalla 1979）。その後の談話行動における、つまり主として行為内的なメタコミュニケーションの意味と機能に関する研究については、上記Techtmeier（2001）に鳥瞰的な記述がある。さらに談話展開の局地的な実行におけるメタコミュニケーション発話の特定機能（理解の確認や談話進行の制御）についてはBublitz（2001：前者）やTiittula（2001：後者）が詳しい。

上記の諸研究と平行する形で、1980年代以降進展してきた特異な研究分野として、いわゆるポラ

イトネス（politeness)、「丁寧さ」の普遍性をめぐる研究がある(Brown / Levinson 1987)。これは英語という個別言語の語彙表現とそれが表す概念から出発するが、理念化された行為者像に基づく普遍概念（つまり日常用法から派生し、しかし一段上からそれについて語るメタ言語）として構想され、言語使用における同じく普遍的なストラテジーの解明が目指される。

本研究では、メタコミュニケーション概念及び言語使用方策としての「丁寧さ」の普遍性措定の妥当性に関する議論には重点を置かない。むしろより広範に、普遍性措定以前の問題設定として、類似の概念や対応する個別言語表現を精査することで、評価表現（概念）をも含めたメタコミュニケーション表現とその背景的な意義関連の生態的配置を解明することに集中する。つまりこの研究は、メタコミュニケーション表現としての「丁寧さ」などをも含め、さらに他の積極的・消極的な評価に結びつく概念と表現およびその他のメタコミュニケーション表現を、日独語という個別の言語とその社会的歴史的背景に関して解明することを目指す。

上記に類似した方向性を持つ研究には、イギリス語における politeness という表現の意味合いを17世紀まで遡り歴史的背景上で解明したワッツの労作（Watts 1999)、あるいはドイツ語表現 höflich（英語 polite に当たるとされるがドイツ語では歴史的に存在していた意味内容が空虚化したとされる)、freundlich（「親切な」、「友好的な」)、herzlich（「真心のこもった」）の関連を小品ながら明快に提示したヘルマンス（Hermanns 1993）の寄与などがある。例えば Hermanns (1993) の論じる höflich、freundlich、herzlich の各語彙は、Duden 社刊行の一巻本の Universallexikon では、それぞれほぼ1対3対4の分量で既述されており、現代語における意味と意義の差異を想定できる。

4．課題と方法

4．1．課　題

言語行動や、より広く相互行為（コミュニケーション行動）一般について記述し、性格付け、評価するメタコミュニケーションの表現は、様々な言語において、様々な程度と様態で発達している。例えば最も端的に「言う」ことに関する動詞語彙は、従来 verba dicendi（伝達動詞）として類型化され研究されてきた（日独対照事例は西嶋2000a)。本構想は、現代の日本語とドイツ語を題材にして、メタコミュニケーション関連の語彙単位だけでなく、慣用句、慣用表現、自由表現としての文やテクスト、さらにはひとまとまりの談話の単位にまで対象を広げ、社会的なコンテクストにおける言語行動や、より一般的に相互行為事象のどの側面が、どのように主題化され、特徴づけられ、評価されるのかを解明する方途を探る試みである。その探求を通じて、日独語による言語行動の背景にある、心的社会的な様々な関連、とりわけ、それぞれに優先される意義関連（上記のように、参加者がどのような事象の成立や不成立を気にするかということ）を相互に対照し解明することを目指す。

例えば、「人にしゃべらせない (die anderen nicht sprechen lassen)」という日独語の常套的表現は、日本語では否定的評価と結びつきやすいが、形式上対応するドイツ語表現は、むしろ発話への積極性と指導力の肯定的評価と結びつく可能性がある。このような事象の背後には、対面談話が互いに合わせながら行われる「共話」として捉えられるか（統合的様式)、合わせたがらない「競話」であるかによって（競合的様式)、異なる意義関連を想定することができる（丸井 2003)。前者では、皆がそれぞれ何かを言うのがよいとされる傾向が勝り（大浜1992)、後者では、言いたがる他人を制してでも発言を貫徹することは積極的に評価される（Reinelt 1992)。逆の方向から見て、そのような異なる意義関連を背景に成立するメタコミュニケーション表現の成り立ちと組み立てを解明することを目指す。

次節で詳論するが、まず日独語の語彙と慣用表現の分野で、関連する表現の分布状況と、意味の

基本性格を調査し、より自由な表現とより広範な言語表現形式におけるメタコミュニケーション表現の対照へと拡張する。次にそれぞれの言語におけるメタコミュニケーション表現の特性が、どのような社会的文化的な背景に関連づけられるか、またどのような言語行動上の局面や方策によって動機づけられるかを究明する。その全過程を通じて、言語行動の単なる記述再現の表現でなく、上記の例のように、さまざまな意味合いで行為や態度の評価に結びつく表現を重点的に追究する。

遠い目標としては、メタコミュニケーション表現を、語彙・慣用表現レベルからテクストさらには談話レベルに至るまで体系的に対照し、それぞれの社会文化集団における規範諸観念や意義関連のネットワーク、進行する言語行動の段階や局面と方策へと結びつけ、全体として把握することを目指す。日独・独日の双方向から見たメタコミュニケーション表現、及び日独語による言語行動の生態学的な見取り図が得られると期待する。それを通じて意義関連、つまり例えば対面談話事象の参加者達が何を気にして発言し行動するかをより明確に捉えることができる。そういったコミュニケーションの方式とその差異について、日独語の一方から他に対する案内としても利用できるだろう。さらには日独の異文化間コミュニケーションにおける諸問題を解決する基盤を提供することができるだろう。

4．2．作業手順

さしあたり日独語の語彙と慣用表現の分野で、関連する表現の分布状況と意味の基本性格を調査することから始める。例えばいわゆる遂行動詞や発話行為の記述的表現の分野では、分布がドイツ語（一般にヨーロッパ諸語）で密であり、ヨーロッパ諸語からの翻訳形として近代以降漢字語彙の転用や創設によって造語された形式や、近年の英語などからの「カタカナ語」形式による移入を除くと、日本語では比較的まれであることが知られている（丸井／西嶋 1991）。メタコミュニケーションに関連する様々な語彙や慣用表現が、相互行為のどの側面を主題化し、性格付けや評価への関連を可能にするかを精査する。これにはまず単一言語及び二言語辞書のほか、マスメディアのテクストや文学テクストなどの特定テクスト類における使用状況の個別調査、および翻訳対応等の調査も有効である（西嶋2000 a）。

この関連では慣用句の調査が興味深い。例えば動植物や食物関連の語彙を含む場合、性格付けや評価に一定の傾向が見られるという現象がある。「野菜」関連は傾向として評価に関して否定的である。直訳すると「キュウリを持つ」となるドイツ語表現は「間抜けな」言動を表す。「イモい」歌い方や服装も同じく否定的である。服装を相互行為に含めるか否かという問題は、メタコミュニケーション表現の外延の範囲と領域の確定という課題に結びつく。ここでの論はもちろん含まれているという立場によっている（注３）。

さらにこれとは別種の語彙類にも調査を拡大する。例えば形容詞（あつかましい、frech？）や副詞的表現（でしゃばって）の類、及びメタコミュニケーション表現や評価に関わる文法的な、特に形態論的な手段（respekt-los に対して respkt-voll など）を調査し、それらの意味と用法における相互行為への関連性を解明する。これら調査を基に、研究をより自由な表現とより広範な言語表現形式におけるメタコミュニケーション表現の調査・対照へと拡張する方途を探る。

定型化したメタコミュニケーション表現の背景をなす（規範、価値などの）諸観念についてより現実に即した対象像を得るための調査としては、いくつかの中心的表現に関して、日独語の母語話者に対する「語感」と言語体験の調査を実施する。単なる量的調査ではなく、民族誌記述的な意味で、比較的長時間にわたる集中的な対面調査が有効である。各々の言語集団において通用する規範観念を含む意義関連の生態論的な眺望を得ることが主眼である。この調査と平行し、調査内容を統合し社会・文化の背景上に特性化する理論的枠組みを構想し、具体化する方向性を探る。

上記の作業のさしあたりの成果として、語彙やその他のレベルでの表現のおおまかな対応あるいは差異が確定され、関連の相互行為的な意味成分の概略が示されると見込まれる。それは上で述べたように、両言語のメタコミュニケーション表現集や、ある種の簡易な語彙集の形をとることが期待される。この基礎の上に、さらにそれぞれの言語における様々な表現レベルでのメタコミュニケーション表現の特性が、どのような社会的文化的な背景に関連づけられるか、またどのような言語行動（相互行為）上の局面の主題化・焦点化や、特定の意図に基づく方策によって動機づけられるかを追究する。その際相互行為の一般的な構成のメカニズム（談話における行為や話題の組織など）への関連はもとより、社会文化集団的に特性化された協調の様式（差異あるいは同一への指向、合わせるか、競うか、など）と、個別な相互行為類型に特有の原則（参加資格、当事者の認定など）に注目する（丸井 1992 / 2003）。

一方で上のような理論的な枠組みの精密化を図ると同時に、ドイツ側の研究者との情報交換が特に重要である。言語表現の持つ社会行動上の潜勢力を見積もるだけでなく、実際上の社会的な行動能力の内実への関連づけが不可欠だからである。これら要因を考慮した上で、様々な形式上のレベルおよび行為類型に属するメタコミュニケーション表現の記述を行うには、さらに日独語の（対面）談話レベルでの事例収集と分析事例の調査およびその再解釈（メタコミュニケーション分析）が必要となるだろう。上で述べたように、テヒトマイアーの言う第二の類型（行為内的タイプ）への拡張を考慮することになる。

記述のようにこれら調査と考察の全過程を通じて、言語行動、相互行為の単なる記述再現の表現ではなく、多様な意味合いにおいて、行為や態度の評価に結びつく表現を重点的対象の一つとして究明する。この多様性の解明は、それぞれの社会における相互行為の特質と多様性の解明に貢献することができる。

5．結　び

メタコミュニケーションの表現と行為に注目するのは、そこでは元来偏在する言語行為の自己回帰性が他に増して明確に観察されるからである（Brinker / Sager 1996, 115-）。この現象はさらに広範に、思考について思考する（それを表現する）、認知の状況をモニターする（それを表現する）といった人間に特徴的な能力とも関連する（Techtmeier 2001, 1449-）。無限に問いかけつつ遡及することが可能な思考や談話の世界は人間に固有である。ヘーシェン（Heeschen 1980）の言う言語行為の根本的な間接性もここでこそ見誤りようもないほど明確になる。ことば（話し）自体を対象とすることば（話し）は、増殖し進行するほどに、即物的行為および外界の物理的世界から遠ざかるからである。文学の表象世界も広義のメタコミュニケーション言語の上に成立する。以下の例は日本の現代詩人である入沢康夫の作品によって筆者が拙論に与えた標題に基づく（丸井 1977）。

例 2

私は書く
私は「私は書く」と書く
私は「私は「私は書く」と書く」と書く　（以下同じように）

詩であれ散文であれ、広い意味での文学コミュニケーションは、思考と言語行為におけるメタコミュニケーション能力の祝祭であり、合わせ鏡の地獄でもある。

注

1) これは筆者の用語である。正確には「行為外指示関説的」とすべきであろうが煩雑を避けた。
2) 従ってこの研究の言説はメタ・メタコミュニケーションということになる。
3) 相互行為ということでここでは共存在(居合わせることなど)をも含む。

文 献

〈欧文〉

Brown, Penelope / Levinson, Stephen (1987)
Politeness - Some universals in language usage, CUP.

Bublitz, Wolfram (2001)
Formen der Verständnissicherung in Gesprächen, Brinker, K. / Antos, G. / Heinemann, W. / Sager, S. (Hgg.) : Text- und Gesprachslinguistik. Ein internationales Handbuch zeitgenössischer Forschung, 1330-1340, Berlin / New York.

Burghardt, Armin (1986)
Soziale Akte, Sprechakte und Textillokutionen, Tübingen.

Heeschen, Volker (1980)
Theorie des sprachlichen Handelns, Henne, H. / Althaus, (Hgg.) : Lexikon der germanistischen Linguistik, 259-267, Tubingen.

Hermanns, Fritz (1993)
Mit freundlichen Grüßen - Bemerkungen zum Geltungswandel einer kommunikativen Tugend, In : Klein, W. P. / Paul, I. (Hgg.) : Sprachliche Aufmerksamkeit- Glossen und Marginalien zur Sprache der Gegenward, 81-85, Heidelberg.

Marui et al. (1996)
Marui. I. / Nishijima, Y. / Noro, K. / Reinelt, R. / Yamashita, H. : Concepts of communicative virtues in Japanese and German, Hellinger, M. / Ammon, U. (eds.) : Contrastive Socio-linguistics, 385-409, Berlin, New York.

Marui, Ichiro / Schwitalla, Johannes (2004)
Telefongespräche beginnen (und beenden) deutsch-japanisch kontrastiv,『かいろす』, 42号, 14-59, 2004.

Reinelt, Rudolf (1992)
Gesprächsorganisation : Sprecherwechsel im Deutschen -In Kontrastierung mit dem Japanischen, ドイツ文学(日本独文学会), 88号, 101-110.

Schwitalla, Johannes (1979)
Metakommunikation als Mittel der Dialogorganisation und der Beziehungsdefinition, Dittmann, Jürgen (Hg.) : Arbeiten zur Konversationsanalyse, 111-143, Tubingen.

Techtmeier, Bärbel (2001)
Form und Funktion von Metakommunikation im Gespräch, Brinker, K. / Antos, G. / Heinemann, W. / Sager, S. (Hgg.) : Text- und Gesprächslinguistik. Ein internationales Handbuch zeitgenössischer Forschung, 1449-1463, Berlin / New York.

Tiittula, Liisa (2001)
Formen der Gesprächssteuerung, Brinker, K. / Antos, G. / Heinemann, W. / Sager, S. (Hgg.) : Text- und Gesprächslinguistik. Ein internationales Handbuch zeitgenössischer Forschung, 1361-

1374, Berlin / New York.
Watts, R, J. (1999)
Language and politeness in early eighteenth century Britain, Kienpointner, M. (ed.) : Special Issue on Ideologies of Politeness, Pragmatics, vol.9, No.1, 5-20.
Wunderlich, Dieter (1976)
Studien zur Sprechakttheorie, Suhrkamp.

〈和文〉
大浜るい子（1992）
「談話分析－日独のあいだの『話し合い』」、ドイツ文学（日本独文学会）、88号、111-123。
川島敦夫（編：1994）
項目「Metakommunikation」、ドイツ言語学事典、588-589、紀伊國屋書店。
西島義憲（2000）
「コミュニケーション行動評価概念研究のための予備的考察－対照社会言語学の視点から」、金沢大学経済学部論集、20-1号、107-132。
西島義憲（2000a）
「伝達動詞の日独対照の試み－小説およびその翻訳を利用して」、文体論研究（日本文体論学会）、46号、42-60。
西嶋義憲（2003）
「『へりくだり』と Demut の比較－カフカのテクスト『変身』を例にして」、ドイツ文学論集（日本独文学会中国四国支部）、36号，61-71。
丸井一郎（1977）
「私は私は書くと書く－文学テクストにおける－による言語行為の理論のために I」、愛媛大学教養部紀要、10号、141-170。
丸井一郎（1992）
談話の相互行為的基盤と「協調」の概念、ドイツ文学（日本独文学会）、88号、89-100。
丸井一郎（1996）
「相互行為の評価概念」、人文科学研究（高知大学人文学部人文学科）、4号、219-243。
丸井一郎（2000）
「異文化性と教授方策－非言語表現を素材に－」、高知大学学術研究報告、49巻、9-29。
丸井一郎（2001）
「異文化適応教育の諸前提」、国際社会文化研究（高知大学人文学部国際社会コミュニケーション学科）、2号、25-49。
丸井一郎（2001a）
「非言語表現の意味作用：異文化適応教育の構成要因として」、高知大学学術研究報告、50巻、211-229。
丸井一郎（2003）
「言語相互行為の協調様式・相互行為原則・異文化性」、高知大学学術研究報告、52巻、205-215。
丸井一郎（2004）
「文学テクスト」再考－異文化テクストの理解のために－、ドイツ文学（日本独文学会）2巻第5号（通巻115号）、16-29。

Handlungs- und Ausdrucksformen von Metakommunikation
- Zur Vorbereitung einer deutsch-japanischen Kontrastierung -

Ichiro MARUI

Zusammenfassung

Metakommunikation (MK) stellt eine der grundlegenden Chrakteristiken dar, die den Menschen von anderen Tiergattungen unterscheiden. Es gilt, dass bei MK zwei Aspekte zu differenzieren sind : Der eine ergibt sich aus einer eher situationsexternen bzw. -übergreifenden Sichtweise, die MK in Zusammenhang mit allgemeinen Vorstellungen von Werten, Normen o. ä. in einer Menschengruppe betrachtet, während der andere Funktionen und Bedeutungen von MK in gerade ablaufenden, sich selbst bildenden Prozessen des Gesprächsereignisses thematisiert (Techtmeier 2001).

In diesem Aufsatz wird ein Projekt vorgestellt, das zunächst von dem ersten der beiden genannten Aspekte ausgehend eine Kontrastierung von MK im Japanischen und Deutschen anstrebt. Dabei handelt es sich darum, herauszuarbeiten und zu vergleichen, welche Aspekte in interaktionalen und sozialen Geschehnissen jeweils die MK-bezogenen Handlungen und Ausdrücken thematisieren, (charakterisierend) beschreiben und / oder bewerten. Von der lexikalischen Ebene aus aufwärts zu den komplexeren werden sprachliche Formen u. a. Redewendungen und idiomatische Ausdrücke hinsichtlich der genannten Eigenschaften untersucht. Anschließend wird der zweite Aspekt von MK, d. h. der den Ablauf gestaltende, in näheren Betracht gezogen. Als Ergebnis ist eine Gegenüberstellung von Sinnbezügen und Prinzipien zu erwarten, die über die Hintergründe feststellbarer Charakteristiken der MK in den beiden Sprachen bzw. Menschengruppen erklärende Auskünfte geben können.

平成17年 (2005) 11月18日受理
平成17年 (2005) 12月31日発行